

「児童生徒理解のための研修会」

智頭教育会生徒指導部会

1 はじめに

智頭教育会生徒指導部会では、部長、副部長と町内の7小中学校の生徒指導主任が定期的に部会をもち、各校の児童・生徒の様子や課題について話し合い、改善するための取り組みを進めてきた。昨年度からは町内全小中学校に導入されたQ-U検査による児童の実態把握やその活用について共通理解を図り、児童生徒理解に努めてきた。本年度は県教育センターのスーパーバイザーである名城大学・曾山和彦准教授を迎えての研修会を計画し、児童の実態分析や方策の検討の仕方について研修を深めたいと考えた。

2 研修のねらい

- ① 児童生徒がよりよい人間関係を築くための指導について、各校の実態をもとに、特別支援教育の視点から具体的に学ぶ。
- ② 児童が中学生になってから力をよりよく発揮できるようにするために、小学校のうちに取り組めること、中学校で取り組めることを具体的に学ぶ。

3 研修内容

特別支援の必要な児童へのかかわり方、まわりの児童の育て方を中心に講義・演習を行った。

曾山スーパーバイザー講演内容（抜粋）

「特別支援の必要な児童へのかかわり方」

○気になる子が気にならない学級1 ～教師がロールモデルを見せる～

- 教師が、気になる子の「気にならない点」を見つけ、「褒める・勇気づける・認める」働きかけをしている
 - 教師が、気になる子の「気になる点」は、「非言語・対決アイメッセージ・確認」による働きかけをしている
- 教師をモデルにして、「ミニ先生」が教室にあふれている。だから、学級の雰囲気があたたかい

○気になる子が気にならない学級2

- 学習規律・ルーティンワーク
- リズムとテンポ
- 1指示1動作

→気になる子が生き生きと取り組める授業は周囲の子どもにとって、さらに意欲的に取り組める授業となる

○通常学級における特別支援教育が進められるために

- 特別支援教育コーディネーターが機能している
- 校内委員会が機能している
- 個別の指導計画の作成&機能している

○対象児童生徒への基本的な支援～自尊感情&ソーシャルスキルを育む～

- 「褒める、勇気づける、認める」ことで2次障がい（日常的な注意，叱責による自尊感情低下）を防ぐ
- 未・誤学習のソーシャルスキルを教える・修正する（特に ADHD、PDD）

○気になる子の在籍学級で使いたい主なカウンセリング理論・技法

- ユーメッセージよりも、「対決アイメッセージ」
- 「リソース探し」、「例外探し」の徹底
- 意図的な「モデリング」
- 構成的グループエンカウンター&ソーシャルスキルトレーニング

○まとめ～通常学級における特別支援教育が進められるために必要なこと～

- 対象児童生徒の障がい理解→研修を
- 担任が一人で対応できるかどうかを共通確認する校内体制→体制づくりを
- 学級が全ての児童生徒にとって満足する場所になっている→学級づくりを
- お互いに「助けて」と言える校内の雰囲気がある→職場内コミュニケーション促進を

演 習

- ・ DESC法によるアサーティブな対応
- ・ 承認感の向上を図るSGEのエクササイズ「いいとこ四面鏡」

4 研修のまとめ

(1) 成果

今回の研修は事前に町内7小中学校の課題やニーズを集約して講義内容をお願いしていたため、実情に合った研修を行うことができた。特に、DESC法やSGEの「いいとこ四面鏡」などは課題解決に向けての具体的な方策として実践していくことができると考える。また、「一斉指導における個別支援の配慮」「担任一人で対応する際のポイント」といった内容は児童への対応や学級経営の基本となる事柄であり、対応を考えていく上での指針として活用できると考える。

(2) 今後の課題

今回の研修で得たものを各校に持ち帰り、職員で共通理解を図り、実態に合わせて活用していくことが大切であると考えます。

また、各校で実施しているQ-U分析を担任の学級経営に生かす資料としてだけでなく、職員全体で各学級の人間関係づくりの方策検討を行うための資料として活用できるようにしていきたいと考えます。

5 おわりに

研修会には50名近くの予想以上に多くの参加者があり、特別支援を必要とする児童・生徒理解への関心の高さがうかがわれた。参加者からも「いいとこ四面鏡、学級でぜひやってみたい。」「難しさを感じている子どもへの対応の参考になった。」といった声も聞かれ、有意義な会であった。